かじか滝

バードは肉を食べるのが大好き。でも、この時代、牛肉や豚肉は日本ではそう簡単に食べることはできなかった。バードが行く先々の宿屋で食べたのは、卵、ご飯、魚、そしてほんのたまに、運が良ければ鶏肉にありつくこともあった。

市野々に泊ったバードは、その晩何を食べたのだろうか。横川が流れるこの村では川魚がたくさんとれた。

この日、バードに出された夕食は、一口か二口で食べられる小さな焼魚だった。体のわりに頭が大きい。新潟県の阿賀野川で鮭の塩焼きを食べた彼女にとって

は、なんとも物足りない感じがする。。顔もちょっと気持ち悪い。ところが、イトーときたらそんなことはお構いなしに、この魚をパクパク食べている。

「イトー、そんなにデリシャスかい？」

「いや、うまいですよ。食べてみてください」

恐る恐るフォークを出したバードは、尻尾の方からと口に入れてみた。するとどうしたことだろう、うまみのある濃い味が口の中にじわーっと広がってきた。今度は、頭の部分からまるかじり。

「うーん、、うまいね」

ふだんは、いかつい顔をしたバードも、おいしいものを食べる時は笑顔になる。

「これ、村のリバーでとれんですか？」

「はい。たくさんとれるみたいですよ」

こう答えると、イトーはさっき聞いたばかりだという、珍しいかじかとりの方法を説明しだした。

「この川のもっと上流に滝という部落があるそうです。そこには自然の大きな岩が川をせき止めたかじか滝という滝があって、かじかがたくさんとれるのです」

「へえ？ネットで捕まえるの？」

「もちろん、網でもとれますが、もっとおもしろい方法です。かじか滝は、ゆるやかな滝で、水がざあざあ落ちて来るのではなく、滑り台みたいにゆるやかな岩の上を、水が薄くスースーと舐めるように流れているそうです。その滝をかじかが泳いで登ってくるところを捕まえるのです。川のそばから、木の枝、例えば柳の枝を折ってきます。この枝を小さな滝にそって垂れさせ、流れ落ちないようにところどころに石を乗せておくんです。しばらく放っておいて、滝の淵で水浴びをするのもよし、滝を上ってくるかじかを一匹づつ捕まえるのもよし。

二、三十分したら、ゆっくりと枝を引き上げます。その枝を網の上で振ると、パラパラとかじかが落ちて来るんです。滝の下にできた淵に住んでるかじかは、ゆるやかな岩を上流を目指してちょろちょろっ、ちょろちょろっと登ってきて、この枝で一休みしてるんですね。それをごっそりいただくわけです。何回か繰り返すと、結構な数になるとか」

「へえ？鯉の滝登りみたい。」

「え？よくご存じで」

「日光だったかと思うけど、掛け軸で見たわ」

「鯉は滝を上ると龍になりますが、かじかは人間の餌食になるのです。河原に鍋

を持っていき、水を入れて味噌を溶いておきます。その中に、焚火で熱した石を入れるとみるみるうちに沸騰してきます。そこにとったばかりのかじかを放り込むと、おいしい味噌汁ができるのです。石焚き、と言って原始的な味がするそうです」

「オー、イトー！私が味噌汁が嫌いなことは知ってるよね。味噌のにおいがどうもだめなの。でも、プリミティブな味なら、トライしてみる価値があるわね」

バードは、農家の手作りのどぶろくではなく、小国の酒屋が作ったという「桜川」を冷やで口にした。

「このかじか、お酒のつまみにはもってこいね」

酒を飲まないイトーは、少し頬が赤らんだバードの顔を見つめながら

「そうでしょうとも」

とうなずいた。とその時、どこからともなく

「プー！」という音がした。

「イトー、どうしたの」

今度はイトーの顔が真っ赤になった。

「いえ、いえ。なんでもありません。この地方には、冬になると若者たちが一軒の家に集まり、みのや笠をみんなで作ります。その時、無作法にも屁をひる者がいて、犯人が分からないときがあります」

「ほう、ほう。誰も自分がやったなんて言いたくないわね。東洋人は君も含めて恥ずかしがり屋だからね」

「そんなとき、犯人を突き止める神様がいるのです」

「え？」

「番頭さーん！ベロベロの神を見せてくださーい」

イトーが大きな声をかけると、番頭がやってきた。手には小さなわら細工をもっている。細い縄の先に、小さな茎が結わえてある。

「これだべが？」

「そうです、これが神様です」

「オーマイゴッド！こんな小さな神様がいるの？」

「番頭さん、ひとつ神様に聞いてみてもらえますか？この中でおならをした犯人は誰ですかって」

「わがりますた」

そういうと、番頭は正座をして神妙な顔で唱えだしました。両手で縄をはさみ、こするようにしてベロベロの神をグルギル回しています。

「ベロベロの神は～、尊い神で～　屁したほうに　ちょいと向け」

すると、縄の先がぴたりとバードの方向で止まりました。

「え―私？私がしたっていうの？」

バードは、簡易イスから崩れ落ちそうになりながら、笑いこけた。